

## 井上靖の文壇デビュー作は『牛』にまつわる作品だった

小説の大家・井上靖（一九〇七年五月六日旭川生まれ）は、一般に、遅咲きの作家と思われる。確かに文壇にデビューしたのが、毎日新聞社在職中の四十歳過ぎだったから、そう思われても不思議ではない。

しかし、彼の文学活動は古く、旧制四高（現金沢大）のころから作詩を始め、井上泰のペンネームで詩誌に作品を発表している。京都大学時代には戯曲『明治の月』を発表し、守田勘弥によって、新橋演舞場で上演までされている。

小説ではペンネームを駆使して、習作を書きまくっていた。二十六歳のとき、澤木信乃名義で『サンデー毎日』の懸賞小説に応募し、佳作入選。二十六歳の大学卒業の年には、長編時代小説『流転』で千葉亀雄賞一席を受けている。ただし、彼の作品で最初に出版された本は、一九四三年に発行された、浦井靖六（浦上五六と井上靖の共著）名義の『現代先賞者伝』という伝記物語であったことはあまり知られていない。

当時使用していたペンネームには、ほかに冬木荒之介、岩瑳京丸、城島靖、京塚承三など

がある。就職後は、学芸部記者の仕事に専念し、ふつとり小説の筆を絶った。四十歳になって、十一年ぶりに小説への気持ちが動き、再び活動を開始した。一九四七年二月から三月に

## お肉の部位による値段の差

食肉も商品ですので、経済の原則に従い、一般に、需要の高いもの、供給量の少ないもの、品質の良いものの方が高い値段になる傾向にあります。

需要が高く美味しいといわれている、ロース系やバラ系の部位は、カタ系やモモ系の部位に比べて高値で取引されています。

季節によっても、冬場は鍋料理、夏場は焼肉など、その用途に合った部位の方が需要が増えるため高くなるようです。

かけ、発表のあてのないまま、復帰後第一作『闘牛』を執筆した。この作品は二年後、「文学界」に掲載され、第二十二回芥川賞を受賞し、一気に彼の文名は確立した。以後、彼は花形作家の道を歩み始める。

作家の資質はデビュー作に込められているといわれるが、彼の場合も例外ではない。宇和島闘牛が、兵庫県西宮市に遠征興行したのをヒントに、新興新聞の編集局長が、社運をかけて闘牛大会を企画し、失敗する経緯を書いたこの作には、その後の井上作品に繰り返し現れる、ニヒリスティックな行動者というモチーフがはっきりと描かれている。

## ワンポイント知識